

「こんな人たち」と国民を分断



安倍晋三首相の動向や発言をチェックすると、7月4日レポート「安倍三代」を思い浮かべる。父方の祖父・安倍寛、父・晋太郎は相当に筋金入りの反骨者の政治家であった。それに比べ、晋三は「可もなく不可もなく、極めて凡庸で普通で、しかし仲間内では優しく人のいいおぼっちゃま」と評された……少なくとも、内から湧き上がるようなエネルギーに突き動かされて政治をめざしたわけではなかった。」

標題は毎日新聞7月10日夕刊「特集ワイド」。大きな見出しには「安倍さんの本質」とあり、安倍首相の人間性をみるうえでも興味深い。リードから「こんな人たちに皆さん、私たちは負けるわけにはいかない」。東京・秋葉原で1日、安倍晋三首相が今回の東京都議選を通じて唯一行った街頭演説。「帰れ」「辞めろ」コールを浴びた首相はこう言い放った。恐らく戦後政治史に残るであろう「秋葉原演説」。あの光景が浮き彫りにしたものはいかなる。今一度、考えたい。

「まさか、ああいう言葉を国民に向けるとは思っていなかった人が多いのではないのでしょうか。国会で民進党や共産党を相手に言うのとは意味が違いますとコラムニストの小田嶋隆さん。永田町での振る舞いが秋葉原で可視化された意味は、決して小さくないとみる。「自分に賛成しない人間を『国民とは別のカテゴリー』に分けたようなものですから」

味方と敵を峻別し、身内をとことんかばう一方、自分を批判する相手には攻撃的な態度を隠さない。安倍政権の根底にある、まるで「不良少年グループ」のような世界観を、小田嶋さんは「ヤンキー的」と表現する。なるほど、選挙中、「自衛隊としてお願い演説」を行った稲田朋美防衛相は、野党からの罷免要求にもかかわらず、次の内閣改造まではその地位にとどまりそうだ。

「安倍1強」状況では、民主的手続きや法治主義などに基づく近代的価値観の軽視が指摘されてきたが、首相を信奉する人々からは、むしろ喝采を得てきた。『基本的人権の尊重』とか『平和主義』という価値は、戦後民主主義の下、学校で教えられてきた内容ですが、学校で起きていることは好きじゃない、というのがヤンキーの特徴ですから。議論を深め、互いの違いを認めた上で共存していくのではなく、「自分たちを攻撃する敵に対してどれだけ勇敢か」「世間に批判されている身内をいかにかばうか」が行動規範となるわけだ。小田嶋さんの目には、こうしたヤンキー的世界観が若い世代の間で共感を得ているように映る。「最近の若い人たちは『雰囲気壊さず、仲間を大切にしよう』という考えを重んじる傾向が強い。仲間内では意見を主張せずに、我慢して秩序を保とうという気分と『ヤンキー志向』は無縁ではないと思っています」

確かに、各種世論調査によると、20代で安倍首相の支持率が高い傾向にある。

(2017年7月18日)